

「韓国併合」100年特別展 「巨大な監獄、植民地朝鮮に生きる」展示評

吉澤 文寿

(新潟国際情報大学情報文化学部教授)

「韓国併合」から100年になる2010年8月にソウルの西大門刑務所歴史館で民族問題研究所主催の「強制併合100年」特別展「巨大な監獄、植民地朝鮮に生きる」が開催された。私はこのときに残念ながら観に行くことができなかった。ところが、翌年3月に立命館大学国際平和ミュージアムでこの展示が行なわれることを知り、とにもかくにも新潟から京都へ向かったのであった。

展示は4つのテーマに即して、40枚のパネルが掲げられていた。第一に朝鮮植民地化が実現する過程、第二に植民地支配の構造、第三に戦時期の朝鮮人の生活、そして第四に戦後から現在までの「植民地責任」問題について、展示内容が整理されている。そして、それぞれのテーマの内容が、生々しく、興味深い一級史料によって語られている。公文書、日記などの文書類から、絵はがき、パンフレット、地図、双六、チラシなど、当時の様子が伝わる史料を通して、植民地支配の実態を肌で感じる事ができた。

私がとくにおもしろかったのは、辞典やパンフレットなどの複製である。いくつかの複製について、実際に手で触り、ページをめくりながらその内容を味わうというのは、いままで体験したことがなかった。また、映画やインタビューなどの映像資料のあるコーナーも、椅子などに座りながら、じっくり向き合うことができた。日本にも韓国にも、歴史をテーマとする展示や博物館は多くあるが、ガラスケースに入ったままの史料を見せるだけではなく、さまざまなかたちで観覧者に「疑似体験」をさせる工夫がなされているところが増えてきたと思う。この展示でも、そのような創意工夫が見られ、主催者の立命館大学コリア研究センターをはじめとするみなさんの熱意を感じる事ができた。

今日においても、植民地支配、そして朝鮮人強制連行に関連する諸問題は解決していない。それにもかかわらず、とくに日本では植民地支配の歴史が歪曲されるか、忘れ去られつつあるように思えてならない。それを象徴するかのように、2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故は、東北をはじめとする原発立地地域が大都市圏の「植民地」となっている構造を浮き彫りにした。このほかに、沖縄基地問題や在日外国人を見るまでもなく、日本の至るところで植民地主義の構造が再生産されている。そして、「巨大な監獄」をつくった日本の私たちはこのような現実が桎梏となって身動きできなくなっている。いまこそ、歴史を見直すときである。

歴史を歪曲する者が扇動とでも呼ぶべき「わかりやすさ」を手法とする一方で、学問の場で、教育の場で歴史を探究し、守る者はむしろ緻密な実証による説明で事足りりとしてきた感がある。だが、歴史

に携わる者は緻密な実証研究と、その成果を明確なカタチで示すという意味での理論化という両輪をもってすべきではないだろうか。もちろん、私にそれができているとは思えないが、今回の展示はその両輪を見事に実現させたものであった。そのような意味で、私はこの展示を見ることができて本当によかったと思う。

なお、2011年11月28日から12月16日まで、立命館大学コリア研究センターからすべてのパネルとフレーム6枚を貸与いただき、新潟国際情報大学本校にてパネル展を行なった。パネルだけでも新潟ではなかなか見ることができない史料を示すことができるので、一人でも多くの人にみていただきたいと願った展示であった。本学の都合でほぼ平日のみの開催であったにもかかわらず、120人（学内84人、学外36人）が来場した。アンケートの結果を見ても、多くの人々がこの展示内容を肯定的に評価したことを、最後にご報告申し上げたい。

